

No. 44	昭和56年9月20日発行 編集：後藤光男
ねじればね	〒591 堺市百舌鳥西之町1丁98-2 陵南住宅1号棟116号 電話：(0722) 57局7009番
September, 1981	発行：日本甲虫学会 〒658 神戸市東灘区御影山手2丁目19-8 大倉正文方 電話：(078) 881局2706番 郵便振替口座 大阪 39672番

伊賀正汎氏の思い出

澤田高平

確か1950年ごろに初めて伊賀さんのお名前を知ったように覚えている。当時は大阪の科学博物館（現在の自然史博物館）が天王寺美術館の一隅に間借りしていたころであった。そのころ、発足して間のない近畿甲虫同好会の例会がこの美術館で開かれていた。その席上で初めて白せき瘦身の氏にお目にかかったのであるが、若輩の私などはいつも末座に控えていたものである。その後、虫がとりもつ縁で、近鉄線の恵我之荘の氏のお宅にお伺いするようになり、大阪の阿倍野橋に新しく開かれた歯科医院には三日にあげずお伺いするようになった。そのころは氏が義歯の技工をすまされてから、阿倍野筋の寿司屋にお供してご馳走になったこともしばしばである。氏は酒は一滴も口にされないのに、今から考えると随分厚かましくお世話になったものである。

土佐沖之島の科学調査が行なわれた際、伊賀さん、阪口浩平先生等とご一緒させていただいた。その時 *Habroloma griseonigra* を見つけられて *H. lewisii* との関係など説明された氏のお声を今でも思い出す。

一方、氏は文章も虫の図も大へん上手であられたが、名コレクターとしても有名であった。私もそのコツを盗まんものと注目していた一人である。氏は同じ場所を丁寧にコツコツさがされる一方、人があまり関心を持たない場所でもよく注意して採集されていたようである。さらにテーブルコレクションの手際の良さも定評があったようで、私なども虎の子のルリクワガタをいつの間にか気持ち良く提供していた記憶がある。これも氏の包容力のあるご人徳の致すところであろう。

私はハネカクシに興味を持って約25年になるが、初めて D. Sharp の *Trans. Ent. Soc. London* の日本産ハネカクシの原文を見せていただいたのも伊賀さんからである。当時、私にとってはバイブル以上のありがたいものであったが、この100頁に余る貴重な文献は、のちに私にゆずって下さったものであり、今も手許にあって活用している。その他、美しい C. G. Calwer の *Käferbuch* など珍らしく、重要な文献のかずかずを見ることができた。これらは、氏の素晴ら

B

加入学会・同好会記録

会名				入会年月日 昭和 年 月 日			会員番号		
会事務所住所 〒				電話番号() 局 番					
会誌・会報名				<input type="radio"/> 月刊 <input type="radio"/> 旬刊 <input type="radio"/> 年回 (<input type="radio"/> 定期 <input type="radio"/> 不定期) <input type="radio"/>					
1. 振替口座		2. 銀行口座 銀行 銀行			支店 支店		3. 小為替 4. 現金書留 5. 現金手渡		
送年	金日	方法	年度	卷	号通	番号	会費年額	送金 手数料	摘 要

A

その他記録

学会・同好会会費支払記録

送年	金日	方法	年度	卷番号 通番号	会名	金額	送金料	摘要

しい標本類とともに、私の甲虫への思慕をますますかきたてて、現今に及んでいる。

後年、私が大阪を離れたこともあって、氏をおたずねすることが少なくなった。ときたま氏にお目にかかることがあると、外国産の大形甲虫類をドイツ型の大きい標本に入れて持って出てこられたことを覚えている。

最后にお会いしてから半年もたたないのに、その伊賀さんの突然の計報に接するとは、全く予期せぬことであつた。心からご冥福をお祈りする次第である。

会費の納入記録と受領図書整理の私案

後 藤 光 男

私は本誌でさきに手許に送られてきた学会誌や同好会報で総目録が発行されなくても、ある程度の厚さになれば総目録の貼込みの余裕を見込んで仮製本すると述べた。これは散逸を防ぐためであるが、それでも製本の際に既刊号を揃えてみると欠号があつたりして、あわててバックナンバーで充足しなければならぬこともある。私は30年代より会費と受領図書や昆虫に関する事柄はすべて記録することにしているが、支払順と受領順それぞれの記録であるので、書き落しがあれば未納と欠号を見出すのに容易でない。

昨年までは秋の中頃から翌年度の会費の通知が到着し年内にその年度の会報が発行されて、会員としての義務と権利が終るといふパターンであつたが、最近では会報の発行が両年にわたり、また次年度の会費も据置かれることが少なくて年々値上の傾向にあるようだ。

昭和56年度分の会費の納入と1月1日以降受取った図書の整理に、私案として別図のような様式で整理をしている。いずれもタイプ印書、ゼロックスでコピーをとり、綴込みはリヒト2穴リングファイルA152、B-5を使用している。A図は会費の支払順に記入しておりB図に転記する。BはB4の2つ折(即ちB5の4頁)、1頁だけ印刷をしており、2頁以下は白紙で時には外枠を黒インクで線引きしている。送金年月日までの上欄はすでに必要事項を書き込んでいて、送金の都度必要個所に記入して既納・未納の記録としている。特に○号から○号まで3、6、12月払の誌代の場合、記録しておかないと封筒の上の前金切れの通知だけでは見落す恐れが多分にあると思われる。2頁は封筒の印刷部等の貼込みに使っており、3・4頁に請求書、郵便局や銀行の振込金領収書、会発行の領収書等証拠書類を送金の順で貼付している。またチラシ程度のもので必要とされるものがあれば2頁と3頁の間に綴込んでおくと、後日必要があれば直ちに引き出して用足しができると思われる。

C、D、E図は受領図書用でCは到着順の記録、Dは各会発行の個々の記録で裏面は整理番号欄以下の印刷だけである。Eは昆虫類を含めての単行本の受領記録で、シリーズものについてはDを併用して重複購入を防いでいる。

会発行の出版物で2-4頁のもの整理は一寸厄介であるが、最近の事務用品は多種多用で大変便利なものが出ている。これらの整理にはポリプロピレン製でクリアファイルとかカラーファイルの名称で市販されている簡易透明ファイルにはさみ込んで、さらにボックスファイル(本誌38号)で分類保管すれば、その整理は完全と思われる。

ラベル印刷のあれこれ 追補(5)

後 藤 光 男

(p)

前号 (m) 項でゼロックスについて書いた。複写機は各メーカーとも白黒図については鮮明にコピーされるが、写真についてはやや難点があるように思われる。しかし機種によってはかなり原図に近いコピーがとれるものもある。ゼロックス3402を使って、昆虫と自然5:1(1970)P.1に掲載された私が兵庫県生野で写したダイコクコガネの密着原図をコピーしたのが次図である。右側は網目スクリーンフィルムを通してのコピーで、左側はフィルムなしのコピーである。以前に原著をコピーした際に記載文は鮮明にコピーができたのに原図のコピーが、どうしても鮮明にコピーされず、うまい方法はないものかと思ったことがあったが、フィルムの使用でかなり鮮明度が表現されるようである。

(q)

新しい職場にきて1年を迎える。この間にほぼマスターできたものに和文タイプライターがある。昔のように字に枠をあてて、ガチャ・ガチャ、ガッチャンと印字していたものが、字に枠をあててキーを押すとガッチャンと印字される電動式である。非常に簡単なので誰でも容易に印書ができるが、私がマスターしたのは配置であって、すべての文字が音読みになっているので、仲々探し出せずこれまでしばしば辞書のお世話になった。現在のタイプライターの盤面は常用活字を中心として、カタカナ・ひらがな・大小英文字・数字・記号等が配列されている。事務用での印書には不便はないが、昆虫用語等についてはカタカナ・ひらがなによる以外印書はできない。10月1日から常用漢字表に95字ふやされて1945字になり人名用も54字ふやされた。ふやされた字種のなかに「昆」も始めて追加されて、これまで「こん虫」しか印書できなかつたのが、「昆虫」として印書できるようになった。一台ぐらい手許にあってもよいと思っているが、必要用語活字の別途鑄造が1本いくらで出来るのか見当がつかないと、明朝体では5号活字が最小であり、9ボ活字のものもあるが細丸ゴシック体なので思案をしている。

(r)

この冬は非常に寒さがきびしくてカエデが花をつけなかったとか、サクラの花がおくれたとかのニュースを耳にし、またベランダの青色蛍光灯への昆虫の飛来も極端に少ないうちに秋を迎えた。今年作ったラベルにM項(本誌№28, P.3, 1969)に紹介した凸版ラベルがある。私の勤務している狭山町の西山台と大野台に加えて数地のラベルを4.5ポイント活字組の凸版にした。いずれも3段ラベルで一番上は大和川、淀川、能勢妙見、百舌鳥等としていて、中段が採集月日の書込みで、, 19のみ、最下段が後藤光男採集とローマ字化している。4地点はいずれも大阪府下の一地名であるが採集地としては広い地域になるので、淀川だけのラベルだと上流の三川合流点か、その下流にある鶴殿や赤川か河口に近い長柄か判らないので、一番上の空白に4.5ポイント活字で必要地名を刷り込むことにしている。凸版ではその活字のもつ角の鋭さは見られないが、同一活字であるため、鮮明な印刷によって地名がかなり強調されて、活字版・凸版の組合せはあまり苦にならない。一地方での広い採集地の表示におすすりできる方法と思われる。

原図：普通の原稿 スクリーンなし



原図：普通 of 原稿 スクリーン使用



原図：ろすい色の原稿 スクリーンなし



原図：ろすい色の原稿 スクリーン使用



原図：色地の原稿 スクリーンなし



原図：色地の原稿 スクリーン使用



新入会員



住所変更



退会



認定退会



昭和55年度 収支決算書 (昭和55年1月1日より12月31日まで)

収入の部		支出の部	
会費	1,026,950円	印刷費	1,088,000円
バックナンバー代	154,200	通信費	103,840
別刷代	47,350	消耗品費	47,550
寄付金	30,000	大会費	46,100
函鑑印税*	163,593	幹事会費	12,350
雑収入	54,488	雑費	15,500
預り金	500	預り金引当金	500
前期繰越金	854,747	次期繰越金	1,017,988
計	2,331,828	計	2,331,828

* 現在までに学会へ繰入れられた印税合計 1,982,446円

特別会計収支計算書 (会報発行基金)

昭和55年 1. 1	前期繰越金		997,212円
1. 20	45万円貸付信託収益金 (54. 7. 20~55. 1. 19)		9,975
3. 26	金銭信託収益金 (54. 9. 26~55. 3. 25)		4,228
5. 20	40万円貸付信託収益金 (54. 11. 20~55. 5. 19)		9,516
7. 20	45万円貸付信託収益金 (55. 1. 20~55. 7. 19)		10,706
9. 26	金銭信託収益金 (55. 3. 26~55. 9. 25)		5,351
11. 20	40万円貸付信託収益金 (55. 5. 20~55. 11. 19)		11,206
12. 31	次期繰越金		1,048,194

価値ある標本をより高く

シーズンオフを迎えての標本の整理には、当学会によって永年の経験を生かして作られた、使い易いラベルのご利用をおすすめします。

見本は本誌44号の12頁に掲載しています。紙質は90~110Kの上質白紙です。

ラベル印刷用4.5活字セットも新たに2組揃えました。

用具等のご照会は後藤まで、お問合せ下さい。

***** あ と が き *****

本会の発起人で創立同人の1人であった伊賀正汎君が亡くなって1年をむかえる。さきに黒沢良彦氏によって故人の生前を偲ぶ一文を拝読したが、本号に幹事としてご苦労願っている沢田高平氏から追弔の一文をいただいたので冠頭に集録させていただいた。学会としても昆虫学評論の一号を彼の追弔にあてることで準備をすすめているが、筒井嘉隆氏を中心として彼と生前特に親しかった友人によって追弔集が草されることになったので、準備された原稿の一部は追弔集の方に収録されることになっている。私も一文を草した中に彼とともに大林一夫・野村鎮・白畑孝太郎3氏のお名前もあげているが、甲虫学会が国外からも注目される学会になりえたのも上記4氏の常に寄せられたご支援のたまものである。特に伊賀君の創設期から間もないころの学会危機に際しての物質的・精神的な両面支援は、学会今日の基礎を作り得られたのも彼の功績の一つである。ここにあらためて4氏のご冥福をお祈りする(51030)。